＝草野と月海＝
「おのれ〜〜ちびっこ！　ミナトから離れよ！」
「くー、つまだも！」
緑の少女、ラストナンバー１０８「草野」ことくーちゃんが羽化して、俺のセキレイになった。俺は何とか助けたくて、泣いているのを放っておけなくてって気持ちだったんだけど、気付いたら羽化していた。
月海にはすごく怒られました。
そしてこの二人、えらく仲が悪い。ずっとケンカして険悪な感じで…
「吾はミナトの妻じゃ！　わかったかちびっこ！」
「…ぷっ…」
「はっ鼻で笑いおった！　ええいもはや我慢ならぬ！」
月海が水を繰り出そうと、月海の手が水で濡れ始める。くーちゃんははそれに応戦する形で、畳からザワザワと音がしてきた。一触即発だ。

バシャッ！　にょきっ！
俺は二人の間に割って入り、水と草の洗礼を受けた。
その晩、やかましいと言われ、俺は借りていた一人暮らしのアパートを追い出された。返す言葉もなかった。

＝家捜し＝
「ミナト、こうして歩くと夫婦みたいじゃの」
「ううーっ！」
俺は月海とくーちゃんを連れて新しく住む場所を探していた。確かに月海とくーちゃんと一緒に歩くと、子供を連れた夫婦に見えなくもない…んだろうか。月海がうれしそうで、俺も顔がほころんだ。
新しい家として、「出雲荘」というところを見つけた。何故か大家さんである浅間美哉さ

んはセキレイたちの事情をよく理解してくれているようで、温かく迎えてくれた。
涙が止まらなかった。

＝出雲荘へようこそ＝
「では佐橋さん、部屋割りをしますね？」
「ちびっこにはまだ早いからの。当然じゃ」
「ううー…」
出雲荘に来てから、最初に大家さんがしたのは部屋割りだった。
確かに俺一人だったらいいけど、くーちゃんはまだ小さいし…。
「月海さんもですよ？　空いてるお部屋がありますので、それぞれ一人ずつ部屋を分けました」
「おっ大家殿！　吾はミナトの妻じゃ！　別々の部屋では納得がいかぬ！」

「出雲荘は、不純異性交遊は禁止ですから…」
そう言うと大家さんの背後から般若のような姿が見えた。
月海は納得がいかない様子だったし、それに俺も急に決められた事だったから戸惑った。
でも大家さんの般若はあまりにも怖くて、その時、俺は何も言えなかった。
「ミナト……。」
月海は悲しそうに俺を見つめた。